あきた文学風土記

田宮利雄

無明舎出版

あきた文学風土記

田宮利雄

無明舎出版

著者略歴

田宮　利雄（たみや　としお）

1927年秋田県仙北郡神岡町神宮寺生まれ。国鉄在職中、秋田鉄道管理局機関誌ならびに広報紙編集等。「秋鉄ペンクラブ」創立に参画。退職後、秋田鉄道新聞編集長。著書に『秋田ローカル線今昔』『秋田鉄道100話』『雪国ＳＬ物語』（いずれも無明舎出版刊）。『発車線春秋』（秋田鉄道新聞社刊）。

現住所　秋田市泉字新川58－10

あきた文学風土記

定価　二五〇〇円

一九九二年十一月二十日初版発行

著　者　田宮利雄

発行者　安倍　甲

発行所　無明舎出版

秋田市広面字川崎一一二－一

電話　（〇一八八）三二－五六八〇

ＦＡＸ（〇一八八）三二－五一三七

郵便番号　〇一〇

印刷所　藤庄印刷株式会社

製本所　新日本紙工株式会社

※万一落丁乱丁の場合はお取替いたします

© Toshio Tamiya 1992　Printed in Japan

あきた文学風土記

田宮利雄

無明舎出版

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秋田文学風土記◉目次

I

郷土を愛慕した作家と作品…9

小杉天外　新聞小説『魔風戀風』で文壇の寵児に
後藤宙外　明治文壇に大きな足跡
石井露月　俳壇の巨匠、郷里で医業に献身
田口掬汀　記者――流行作家――美術評論家
平福百穂　近代日本画の大家・アララギ派歌人
滝田樗陰　「中央公論」名編集者、日本文芸発展に寄与
安成二郎　新作風をひらいた生活派歌人
堀井梁歩　自由思想に生きた農村運動家
武塙三山　文人市長・小説『単純な男』は秀作
今野賢三　郷土に題材を求めたプロレタリア作家
金子洋文　劇作家・日本演劇界の重鎮
小牧近江　「種蒔く人」発刊の立て役者
山田順子　生涯文学の夢捨てず〝恋の遍歴〟
伊賀山昌三　日本新劇史上特筆される劇作家
小林多喜二　痛恨！わずか三十年の人生
伊藤永之介　農民への愛情を貫いた作家
青江舜二郎　戯曲『法隆寺』で岸田演劇賞受賞
石川達三　新聞小説界の第一人者
松田解子　鉱山に働く労働者を描く
八木隆一郎　舞台劇・放送劇の叙情派
鈴木　清　著作で自らの意志を訴える
矢田津世子　繊細な情感、薄命の美人小説家
渡辺喜恵子　秋田県出身直木賞作家第一号
佐藤鉄章　秋田の文芸同人誌から中央文壇へ
富木友治　柳田国男に師事した民俗研究家
千葉治平　『虜愁記』で直木賞を受ける
加藤富夫　四たび芥川賞候補、惜しまれる急逝
野口達二　歌舞伎に造詣深い劇作家・演出家
杉田瑞子　文学に殉じた稀有な閨秀作家

高井有一　秋田の風土を背景にした名作群
阿部牧郎　旺盛なる筆致、円熟味増す〝売れっ子〟
西木正明　探険・冒険家人生の直木賞作家

II　作家が描いた秋田の風土 …… 107

海は荒れ雨もようの男鹿　幸田露伴
芭蕉を慕い八郎潟まで　正岡子規
峠越え仙岩峠で足捻挫　田山花袋
葉子の実家本荘古雪町　徳田秋声
行脚中五城目森山の眺望　河東碧梧桐
男鹿半島の自然保護に関心　柳田国男
田沢湖の水の青さと深さ　島木赤彦
大曲丸子川月夜の雪景色　ブルーノ・タウト
横手に病床の百穂を見舞う　斎藤茂吉
湯沢で伝導師、文芸誌創刊　山村暮鳥
秋の宮温泉郷で疎開生活　武者小路実篤
歌会で来秋院内峠で車中歌　若山牧水
十和田錦木の悲恋伝説うたう　石川啄木
川反情緒を書いた出世作　谷崎潤一郎
古代人になりきり雄勝峠を　釈迢空
雪解横手汽車旅道中記　内田百閒
素朴な秋田美人に心ひかれ　結城哀草果
大正時代秋田で役人生活　芹沢光治良
山と川のある町・横手が舞台　石坂洋次郎
羽後町貝沢で酪農指導　鶴田知也
秀麗鳥海山・高原美八幡平　深田久弥
田ノ沢分校母と子合奏団　サトウハチロー
再度男鹿の風物に親しむ　島木健作
亀田がヒントで事件解決へ　松本清張
幼時は太田町旧川口鉱山に　高橋喜平
西馬音内盆踊りに魅せられ　岡本太郎
仙北娘マタギの活躍ぶり　戸川幸夫
雄勝町役内川の温泉も背景　沢野久雄
羽後町最後の鷹匠がモデル　藤原審爾
横荘鉄道で米の買い出し　吉村　昭
火山地獄の巻＝後生掛温泉　宮脇俊三
秋田県警刑事も事件に登場　西村京太郎
『奥の細道』最北の地象潟へ　松尾芭蕉

補遺・秋田と文学作品

Ⅲ　秋田文学者群像 …… 175

Ⅳ　秋田の風物をうたった詩歌 …… 203

秋田県内文学碑一覧 …… 219

参考文献 …… 246

あとがき …… 247

あきた文学風土記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

郷土を愛慕した作家と作品

小杉天外

新聞小説『魔風戀風』で文壇の寵児に

こすぎ・てんがい 慶応元年（一八六五）九月一九日、仙北郡六郷町生まれ。昭和二七年九月一日没。享年八六歳。本名為蔵。少年時代、郷里の塾で漢学を勉強。上京して国民英学会、イギリス法律学校（現中央大学）に学ぶ。小説は斎藤緑雨の影響を受けた。明治三三年発表の小説『はつ姿』は、ゾラの写実主義を初めて日本に移入、自然主義文学の先駆を成した。同三六年、読売連載の新聞小説『魔風戀風』は大好評、文壇の寵児となった。

天外の父豊治は、醤油製造、搾油業のほか呉服、古着などを扱う商人であったが、若いころから気骨があり、戊辰戦争の時には、若者数十人を糾合して官軍について行動した。

天外は、父の仕事を手伝いながら漢学を学んでいたが、商売を継ぐ気は無く、二二歳の時に上京した。そのいでたちは、新調の木綿のかすりに小倉のはかま、足駄ばきだった。

奥羽線は未着工、黒沢尻まで歩き、東北線の汽車に乗った。

文学志望の天外は、明治二四年（一八九一）、自作を持って一番心酔していた森鷗外をたずねたが、鷗外は天外の作品を認めず、無下に断られ、つぎに尾崎紅葉の門をたたいたが、その反応は冷たく、かんばしいものではなかった。

すでに二七歳、当時の作家志望者にとっては晩学に属する天外にとって、前途は暗く悩んだすえ、当時異色の文芸批評家として世に知られ、小説『かくれんぼ』『油地獄』などで、作家としても文名をはせていた斎藤緑雨を訪れ、結局は師と仰ぐこととなった。

間もなく緑雨とともに自炊生活を営み、机を並べて

文学の修業に励むが、天外は、それまで草秀という筆名を使っていたが、緑雨のすすめで李白の詩の「三山半落青天外」から引用して、天外を号と定めた。

緑雨との共同生活は二か月で解消したが、翌二五年、緑雨の紹介で、当時の一流紙「国会新聞」に処女作『改良若旦那』を掲載、さらに『どろどろ姫』『改良若殿』などを発表、ようやく天外の名が文壇に注目されるようになった。

自然主義文学の先駆者

そのあと、天外は胸をわずらい、二九年郷里に帰り療養につとめた。この時も、隣村出身の後藤宙外との交流を深め、焦慮を打ち明ける手紙を書き送っている。

そのころ宙外は、坪内逍遙の推輓で「早稲田文学」の記者となり、作品『ありのすさび』によって、天外より一歩先んじて文壇に認められていただけに、病床にあっては焦燥感にとらわれながら苦悩にあえいでいた。

かような環境にあって、三〇年四月、宙外や島村抱月らが結成した丁酉文社に参加し、文芸誌「新著月刊」に『珈琲店』を発表したのが、天外の転機となった。

天外にとって、二九年から三二年までは、いわば過渡的な動揺期といわれているが、この時期の習作といえる作品に『ひな歌』『はれ小袖』『かこい者』『みだれ髪』などがある。

三三年八月、天外はついに文学史上にその名をとどめる『はつ姿』を世に問うた。

この小説は、フランス自然派のエミール・ゾラに影響を強く受けた作風で、写実主義を唱えた天外の最初の傑作といわれる。

明治・大正・昭和の三代にわたる文筆家

天外は晩年、敗戦後の混乱期にも、病弱の身を耐えながら筆を執ることを忘れなかった。まさに、明治・大正・昭和の三代の文壇を生き、昭和二三年には、長年の文学上の業績により、芸術院会員に推され、宮中で陪食をたまわった。

天外の著作で、すぐれた叙景描写は、風光明媚な郷土六郷町の自然環境が、筆先ににじみこんだのであろうか。

さて、天外の名が社会的に喧伝され、一躍流行作家にのし上がったのは、明治三六年二月二五日から同年九月一四日まで、読売紙上に連載された新聞小説『魔風戀風』である。

天外はこの時すでに三八歳に達し、胸の病も克服、自分の立ち直りを賭ける力のこもった作品だった。

当時、新聞小説一回分の原稿料が六十銭であったのが、一躍三円、まもなく五円まで値上がりするほど高い評価を受け、学生たちの恋愛を通じ新風俗を描写した名作であった。

天外が、自然主義文学の開花に果たした役割は偉大なものがあった。

『魔風恋風』の一節

髯の長い二重鳶の其の男は、見掛にも依らず、慌てゝ腕車を降りるや否や、ぴょこ〳〵叩頭したが、その機に黒の山高帽をぽこんと地面に落した。両側からどッと笑聲が起った。「こら！」と巡査はまた其の聲を制した。

男は赤くなッて、密々と人の中に消えた。

すると、此の時しも坂の曲角に立つ人々の眼は、皆一様に輝いた下の方に向いた。此方に立つ群集も、そりゃこそ御出だと首を伸し、人の背後なるは足を爪立てた。

鈴の音高く、現れたのはすらりとした肩の滑り、デートン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして、白いリボン清く、着物は矢絣の風通、袖長ければ風に靡いて、色美しく品高き十八九の令嬢である。

両側に列ぶ幾萬の目は、只だ此の自転車を逐うて輝くのであるが、娘は学校にのみ心急ぐか、夫とも群集の前を羞かしいのか、切りにペタルを強く踏んで、坂を登れば一直線に、傍目も觸らず正門を指して駈付けんとすると、今しも腕車を曳込んだ雑沓の間から、向う側に移らんとしたらしく、二人の書生が不意に躍出した。

曲角の出合頭、互に避くる暇もない、後なる書生に自転車が衝突ったと思ふ間もなく、令嬢は横様に八九尺も彼方に投げられ、書生は仰向きに其處に倒れたのである。

明治文壇に大きな足跡

後藤宙外

ごとう・ちゅうがい　慶応二年（一八六六）一二月二二日、仙北郡仙北町生まれ。昭和一三年六月一二日没。享年七三歳。本名寅之助。明治二二年再上京。東京専門学校（現早稲田大学）入学、同二七年英文科卒。坪内逍遙指導の下に「早稲田文学」記者となり、翌年小説『ありのすさび』『闇のうつゝ』等を発表し、心理描写の妙と称されて文壇に出る。のち秋田時事新報社長、六郷町長。郷土研究に励み、払田柵発見など幾多の業績がある。

宙外の生家は旧払田（ほった）村、資産家の二男として生まれた。幼少はなかなかの腕白、無鉄砲な性格だったが、文章と算術の成績はクラスでも抜群、早くも後に文筆家として立つ片りんをのぞかせていた。

十歳の夏父を亡くし、次第に後藤家の家産が傾きかけ、横手根岸小学校三年の時、一家挙げて上京した。明治十四年兄の事業が失敗、中学を中退、二年間活版工や壮士芝居の役者をやるなど苦労。同十八年徴兵検査のため帰郷し、一時、県議会の書記を勤めた。

同二二年再び上京、東京専門学校に入学。二七年英文科を卒業した。同級に島村抱月がいた。なお、二三年ころ地方政治に関心を持ち、小杉天外と共に改進党員として遊説し、天外が文壇人になるまで、彼への援助を惜しまなかった。

宙外が小説家として世に問うた最初の作品は「早稲田文学」に連載（二八年五月～一〇月）した『ありのすさび』であった。

それと前後して、「新小説」に『闇のうつゝ』を発表。この二作は、心理描写の上に長所をそなえた作品で、小説家としての地歩を確立、日清戦争後に輩出した新進作家群の中でもひときわ目立つ花形として注目

された。

宙外の文名をより高めたのが、『闇のうつゝ』であるが、この小説は、人にだまされて破産したあげく、投獄されて死んだ大尽の娘二人の運命を描いた悲劇で、家の没落という宙外少年時の体験がモチーフとされている。

〝政治小説〟に意欲、新しい展開

明治の世には、青雲の志を抱き、地方から上京する若者が少なくなかった。先の小杉天外と共に、後年親交を重ねた宙外もその一人であった。

三四年、抱月らと「新著月刊」を創刊。同志らの創作を発表、後進の作品を紹介すべき舞台を作った。

宙外の名声が次第に高まるなか、『金色夜叉』の評判で、文壇トップの売れっ子作家の尾崎紅葉に推され、「新小説」を主宰することとなった。

しかし、『闇のうつゝ』以後目立ったヒット作のない宙外は、紅葉邸に出入りしながら新境地を求め、新たな構想を練っていた。

そこで書き上げたのが『腐肉団』で、「時事新報」に連載した〝政治小説〟であった。

『腐肉団』は、当時の政治ボスの地租増徴案事件を中心として、政界内幕の腐敗や、政治家の家庭の乱脈ぶりを細かに描いた作品で、宙外自身、政治に理想を求めていただけに、社会性のある力作だった。

郷土愛に立脚、払田柵趾を発見

その後、宙外は多くの小説、評論を書いている。主な小説は『売節奴』『仮病』『会津節』『うつろ舟』『静苦動苦』など。著書は、『月に立つ影』『裾野』の小説集。短篇集『陽炎集』。小説以外では『秋田戊辰勤王史』『徳川太平記』などがある。また、ジャーナリストとしての立ち場を遺憾なく示した『明治文壇回顧録』（昭和一一年五月岡倉書房刊）は、近代文学研究の貴重な資料となっている。

一時、主張してきた〝田園生活〟を実行するため、猪苗代湖畔に家を建て生活したが、次第に文壇から遠ざかるようになり、大正三年、招かれて秋田時事新報社社長となるが、間もなくやめ、六郷町に居を移し、歴史と考古学の研究に没頭する。

大正六年の春、推されて六郷町長となり、二期八年間その職を勤め、町政に携わるかたわら、古文書関係を収集、昭和二年「六郷町郷土史一班」、その後一一年の歳月を要し、「高梨村郷土沿革紀」（昭和十五年）を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com